

研究論文

知的障害特別支援学校教員における児童生徒の進路指導に対する捉え方

宇土 汐莉*・松山 郁夫**

Perceptions of Career Guidance for Students of Teachers in Special Needs Education Schools for Students with Intellectual Disabilities

Shiori UTO Ikuo MATSUYAMA

【要旨】本研究の目的は、知的障害特別支援学校教員が、児童生徒の進路指導に対してどのように捉えているのかを、小学部・中学部・高等部の各学部の比較を通して明らかにすることである。知的障害特別支援学校教員を対象として、児童生徒の進路指導に対して意識する度合いを問う、独自に作成した質問紙調査票を郵送により配布して回収した。17校から得られた312名の有効回答を分析した。その結果、教員は、進路指導の全般に関心を向けていること、普段の生活の中で進路指導に関して本人や保護者、周囲の教員と話をすることについては、小学部、中学部、高等部の順で高いこと、進路指導の視点からの授業づくりについては、将来をイメージした授業を作成することに対して、小学部よりも高等部の教員の方が、関心が高く、個人を意識した授業を作成することへの関心は、高等部よりも小学部の教員の方が、関心が高いこと等が考察された。

【キーワード】知的障害特別支援学校、教員、児童生徒、進路指導

I はじめに

平成29年4月に改訂され公示された特別支援学校学習指導要領等では、「子供たちの学びの場の柔軟な選択を踏まえ、幼稚園、小・中・高等学校の教育課程との連続性が重視され、障害の重度・重複化、多様化への対応と卒業後の自立と社会参加に向けた充実」が謳われている。自立と社会参加に向けた教育の充実として、「卒業後の視点を大切にしたカリキュラム・マネジメントを計画的・組織的に行うこと」、「幼稚部、小学部、中学部段階からのキャリア教育の充実を図ること」を規定している。キャリア教育については、「特別支援教育において、子どもの地域及び社会生活への適応や以降及び主体的に参加する能力の育成を目指しており、自立し、社会参加するために必要な知識・技能及び態度などを身に付けるため、全学部を通じて示されており、小学部段階から進路指導の位置づけがなされて取り組まれている」と記述されている(神田・伊藤・高橋, 2018)。これらのことを踏まえて、知的障害特別支援学校では、個々に合った知的障害特別支援学校の卒業後を見据えた教育的支援を行っていくことを念頭において、小学部から高等部までの進路指導が行われている。

中央審議会(2011)による「今後の学校教育におけるキャリア教育・職業教育の在り方(答申)」においては、キャリア教育の推進が示されている。特別支援キャリア教育については、「特別支援学校全体で、小学部、中学部、高等部段階の各時期に、児童生徒の発達段階に即した学部教育の独自性を明らかにしながら、系統的かつ一貫性のある教育を行うことが重要視されている」と論及されている。(藤井・川合・

*長崎県立佐世保特別支援学校 **鎮西学院大学(佐賀大学名誉教授)

落合, 2013) しかしながら、進路指導・支援やキャリア教育に関しての研究は、一人ひとりの社会的、職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促すというキャリア教育的観点によるものや、学校組織における進路支援部を中心とした構造的な在り方の分析を扱った研究は多く見られるものの、生徒個々の障害特性に応じた的確な支援方法についての研究が少ないと指摘されている(迫田・今枝, 2023)。

令和3年3月時点での知的障害特別支援学校高等部本科卒業生は全国で18,992名、そのうち一般企業や大手企業系列特例子会社等に就労する者は、6,339名と全体の約33%となっている。就労継続支援A型施設や就労継続支援B型施設等の就労移行支援事業所、社会福祉施設等への入所・通所者については11,538名で、約60.8%と全体の3分の2となっている(文部科学省, 2022)。知的障害特別支援学校の高等部の卒業生は、一般就労が約3割、福祉型就労が約6割である。

キャリア教育については、「キャリアが子供・若者の発達の段階やその発達課題の達成と深くかかわりながら、段階を追って発達していくことを踏まえ、幼児期の教育から高等教育に至るまで体系的に進めることが必要である」と述べられている(中央審議会, 2011)。また、「インクルーシブ教育実践のために提案された職務能力の枠組みは、選択的注意/ワーキングメモリ、数学的予備知識、言語能力、メタ認知的調節、以上の4つの能力に対応している。ジョブ・アビリティの枠組みは、他の教科の授業にも転用でき、専門能力開発プログラムにも利用できる」と報告されている(Prediger, Buró, 2024)。これらの見解は、知的障害のある児童生徒の進路指導の充実のために活用できると考えられる。

知的障害がある場合、「直接行動を共にする友人の存在が希薄なこと、それぞれがごく狭いコミュニティの中で限られた人間関係の中で生活している傾向が如実に見られた。人間関係の広がり小ささは、将来的な孤独や孤立を際立たせる要因として憂慮すべきものである」と指摘されている(迫田・今枝, 2023)、また、知的障害のある児童生徒に対する「進路指導を充実させていくことにおいて、保護者は大きな役割を占めている」と主張されている(藤井・川合・落合, 2013)。これらのことから、各学部の教員がどのように進路指導を行っているのかについて、学部間の教員における認識の違いを検討することは、進路指導に対する各学部の取り組みをより関連させ、各児童生徒に合った進路選択にするための一助となると考えられる。

以上より、高等部教員のみではなく、小学部・中学部教員も含めた進路指導に対する知的障害特別支援学校の教員の認識について、検討する必要がある。このため、本研究の目的は、知的障害特別支援学校の教員が、児童生徒の進路指導をどのように認識しているのかについて、小学部・中学部・高等部の比較を通して明らかにすることである。

II 方法

1. 調査対象

本研究では、知的障害特別支援学校の教員を対象として、知的障害のある児童生徒への進路指導に対して意識する度合いを問う、独自に作成した質問紙調査票を使用して調査を実施した。調査にあたっては、回答者の性別、年代、学部に関する回答を求めた。

分析対象者312名のプロフィールは、表1から表3までの通りである。性別については、男性92名(29.5%)、女性220名(70.5%)、年代については、20代71名(22.8%)、30代101名(32.4%)、40代70名(22.4%)、50代64名(20.5%)、60代以上6名(1.9%)、学部については、小学部126名(40.4%)、中学部93名(29.8%)、高等部93名(29.8%)であった。

表1 各学部と性別の内訳（単位：人）

区 分	男 性	女 性	合 計
小学部	23 (7.4%)	103 (33.0%)	126 (40.4%)
中学部	37 (11.9%)	56 (17.9%)	93 (29.8%)
高等部	32 (10.3%)	61 (19.6%)	93 (29.8%)
合 計	92 (29.5%)	220 (70.5%)	312 (100.0%)

※（ ）内は、全体の総和のパーセンテージを示している。

表2 年代と性別の内訳（単位：人）

区 分	男 性	女 性	合 計
20代	18 (5.8%)	53 (17.0%)	71 (22.8%)
30代	40 (15.8%)	61 (19.6%)	101 (32.4%)
40代	18 (5.8%)	52 (16.7%)	70 (22.4%)
50代	15 (4.8%)	49 (15.7%)	64 (20.5%)
60代以上	1 (0.3%)	5 (1.6%)	6 (1.9%)
合 計	92 (29.5%)	220 (70.5%)	312 (100.0%)

※（ ）内は、全体の総和のパーセンテージを示している。

表3 年代と各学部の内訳（単位：人）

区 分	小学部	中学部	高等部	合 計
20代	38 (12.2%)	12 (3.8%)	21 (6.7%)	71 (22.8%)
30代	43 (13.8%)	29 (9.3%)	29 (9.3%)	101 (32.4%)
40代	21 (6.7%)	31 (9.9%)	18 (5.8%)	70 (22.4%)
50代	29 (6.4%)	20 (6.4%)	24 (7.7%)	64 (20.5%)
60代以上	4 (1.3%)	1 (0.3%)	1 (0.3%)	6 (1.9%)
合 計	126 (40.4%)	93 (29.8%)	93 (29.8%)	312 (100.0%)

※（ ）内は、全体の総和のパーセンテージを示している。

2. 調査機関と調査方法

調査機関は、令和5年11月15日より12月8日までの23日間とした。

調査方法は、47か所の知的障害特別支援学校に、本研究に使用する無記名方式の質問紙調査票を郵送で、1校につき各学部に10部、計30部配布し回収する方法にて実施した。17か所（送付した学校の36.2%）から合計384名の回答が回収され、そのうち全質問項目に記入がなされている312名の回答を有効回答とした（有効回答率22.1%）。

標本となる知的障害特別支援学校を系統抽出により抽出した。具体的には、令和5年11月1日現在の各都道府県の知的障害特別支援学校の名簿の最初からA番目に記載されてある1か所の知的障害特別支援学校、計47か所を抽出した。

3. 質問項目の作成手順

本研究で使用する質問項目の作成にあたっては、1つの質問項目に複数の要素を含まないように、ま

た意味内容を大きく括らないように注意しながら質問項目を作成した。その後、佐賀大学教育学部学校教育課程幼少連携教育コース特別支援教育専攻の学生6名に対して、作成した複数回答可の回答形式を含む21項目の質問項目について、知的障害特別支援学校の教員への調査で使用する事が可能かどうかを個別的に質問した。その結果、全21項目に関しては6名全員から全て使用できるとの回答が得られた。そのため、これら21項目すべてを質問項目として使用することにした。なお、小学部、中学部、高等部の各教員に質問したのは、小学部児童からの個々人の成長を経て、中学部生徒、高等部生徒へと進路指導を行うという連続性があるからである。

全21項目に関する回答の処理について、各学部の児童生徒の進路指導に対して意識する度合いを問う独自の17項目の質問項目における回答は、「まったく関心がない」(1点)、「あまり関心がない」(2点)、「どちらともいえない」(3点)、「関心がある」(4点)、「かなり関心がある」(5点)までの5段階評価とした。各学部の児童生徒の進路指導に対する捉え方について問う独自の4つの質問項目における回答は、(1)から(6)までのうち、あてはまる数字を○で囲むという評価とした。自由記述の回答については、学部ごとに意味内容で分類した。

4. 分析方法

5段階評価に設定した17項目の質問への回答に対する分析方法として、知的障害特別支援学校における小学部、中学部、高等部の学部ごとに、各質問項目の平均値と標準偏差を算出した。次に、各質問項目について、各学部間で平均値に差があるかどうかを検討するために、対応がない場合の一元配置分散分析を行った。その後の多重比較については、最小有意差(LSD)法を使用した。なお、統計処理には、IBM SPSS Statistics22を使用した。これらと別に複数回答に設定した4項目の質問への回答については回答数とパーセンテージを算出した。自由記述については、学部ごとに意味内容で分類した後、個数とパーセンテージで示すこととした。

5. 倫理的配慮

倫理的配慮として、質問紙調査票を郵送した知的障害特別支援学校に対して、書面にて本研究の目的、内容、結果の公表方法、協力は任意であること、調査は無記名で行うこと、回答は個人を特定できないように自由記述項目を除く質問項目においては全てを数値化して集計するため、学校名は一切出ないこと等を説明し、同意を得られた場合のみ回答を依頼した。回答を持って承諾が得られたこととした。

Ⅲ 結果

5段階評価に設定した17項目の質問への回答に対する分散分析によって、個々の児童生徒の進路指導の際、以下の質問にどのくらい意識しているかという問いに対して、各学部の平均値に有意差が認められたのは、「1 児童生徒の将来について普段から考えている」、「2 進路について児童生徒の本人の意思を取り入れる」、「3 進路について児童生徒の本人の意思をどのように聞き出すか」、「5 児童生徒のストレングス(強み)を見つける」、「6 児童生徒の進路に関する情報を得る」、「8 児童生徒の将来のことについてほかの教員と共有する」の6項目(75.0%)であった(表4)。さらに、進路指導に関して個々の児童生徒に対して日々の授業の中で以下の質問にどのくらい意識しているかという問いに対して、「3 進学、卒業後の生活を具体的にイメージできるような機会をもつ」、「5 授業は児童が意欲的に取り組むことができるよう工夫して計画する」、「6 授業は児童が個別に集中して取り組めるものを計画する」の3項目

(33.3%)であった(表5)。

そこで、LSD法を用いた多重比較を行った結果、次のことが確認された。個々の児童生徒の進路指導の際、以下の質問にどのくらい意識しているかという問いに対して、「2 進路について児童生徒の本人の意思を取り入れる」、「3 進路について児童生徒の本人の意思をどのように聞き出すか」、「6 児童生徒の進路に関する情報を得る」、「8 児童生徒の将来のことについてほかの教員と共有する」の4項目は、高等部教員>中学部教員>小学部教員の順で平均値が有意に高かった。「5 児童生徒のストレングス(強み)を見つける」の1項目は、小学部教員が中学部教員よりも平均が有意に高く、「1 児童生徒の将来について普段から考えている」の1項目は、高等部教員が中学部教員よりも平均が有意に高かった。

進路指導に関して個々の児童生徒に対して日々の授業の中で以下の質問にどのくらい意識しているかという問いに対して、「3 進学、卒業後の生活を具体的にイメージできるような機会をもつ」の項目は、高等部教員>中学部教員>小学部教員の順で平均値が有意に高かった。「5 授業は児童が意欲的に取り組めるものを計画する」の項目は、小学部教員が高等部教員よりも平均値が有意に高かった。「6 授業は児童が個別に集中して取り組めるものを計画する」の項目は、小学部教員>中学部教員>高等部教員の順で平均値が有意に高かった。

分散分析により、各学部の平均値に有意差が認められなかった項目は、個々の児童生徒の進路指導の際、以下の質問にどのくらい意識しているかという問いに対して「4 普段から児童生徒のことについて保護者と話をする」、「7 児童生徒の将来のことについて保護者と話をする」の2項目(25.0%)、進路指導に関して個々の児童生徒に対して日々の授業の中で以下の質問にどのくらい意識しているかという問いに対して「1 授業の中で児童生徒の社会参加に必要な力をつけさせようとする」、「2 自立に必要な事柄について実践的・体験的な活動を取り入れた授業にする」、「4 授業は担任だけでなく様々な人と作成しようと計画する」、「7 授業は集団で共同して取り組めるものを計画する」、「8 授業は児童生徒の生活として結びつきのあるものを計画する」、「9 授業は児童生徒が意義のある経験ができるように計画する」の7項目(77.8%)であった。

質問項目	小学部	中学部	高等部	分散分析結果
				F値
1. 児童生徒の将来について普段から考える	4.41 (0.58)	4.32 (0.61)	4.58 (0.70)	4.08 高>中*
2. 進路について児童生徒の本人の意思を取り入れる	3.95 (0.71)	4.01 (0.73)	4.40 (0.70)	11.40 高>中>小***
3. 進路について児童生徒の本人の意思をどのように聞き出すか	3.98 (0.72)	4.02 (0.80)	4.42 (0.73)	10.67 高>中>小***
4. 普段から児童生徒のことについて保護者と話をする	4.52 (0.63)	4.37 (0.69)	4.46 (0.67)	1.55
5. 児童生徒のストレングス(強み)を見つける	4.62 (0.52)	4.45 (0.54)	4.54 (0.64)	2.38 小>中*
6. 児童生徒の進路に関する情報を得る	3.99 (0.74)	4.15 (0.70)	4.52 (0.60)	15.60 高>中>小***
7. 児童生徒の将来のことについて保護者と話をする	4.07 (0.80)	4.22 (0.72)	4.57 (0.60)	13.06
8. 児童生徒の将来のことについて他の教員と共有する	4.26 (0.68)	4.27 (0.59)	4.53 (0.65)	5.34 高>中>小*
カッコ内は標準偏差				*p<.05 **p<.01 ***p<.001

質問項目	小学部	中学部	高等部	分散分析結果 F値
1. 授業の中で児童生徒の社会参加に必要な力をつけさせる	4.41 (0.57)	4.40 (0.51)	4.53 (0.64)	1.45
2. 自立に必要な事柄について実践的・体験的な活動を取り入れる	4.33 (0.60)	4.44 (0.58)	4.38 (0.62)	0.85
3. 進学、卒業後の生活を具体的にイメージできるような機会を設ける	3.75 (0.78)	4.06 (0.76)	4.37 (0.70)	17.87 高>中>小***
4. 授業は担任だけでなく様々な人と作成しようと計画する	3.98 (0.68)	3.98 (0.78)	4.03 (0.76)	0.16
5. 授業は児童生徒が意欲的に取り組むことができるよう工夫して計画する	4.55 (0.51)	4.38 (0.51)	4.37 (0.64)	3.84 小>高*
6. 授業は児童生徒が個別に集中して取り組めるものを計画する	4.13 (0.69)	3.91 (0.72)	3.92 (0.77)	3.37 小>中>高*
7. 授業は集団で共同して取り組めるものを計画する	4.14 (0.67)	3.99 (0.73)	4.03 (0.83)	1.29
8. 授業は児童生徒の生活と結びつきのあるものを計画する	4.46 (0.60)	4.31 (0.55)	4.37 (0.67)	1.68
9. 授業は児童生徒が意義のある経験ができるように計画する	4.40 (0.62)	4.32 (0.59)	4.29 (0.70)	0.95
カッコ内は標準偏差				*p<.05 **p<.01 ***p<.001

複数回答の質問項目に関して図1に、「児童生徒の将来をどこまで考えていますか（複数回答可）」の回答を示した。最も多かった項目は、「社会参加」265名（84.9%）であり、次いで「高等部入学後」7名（23.7%）、「中学部入学後」5名（16.0%）、「小学部在学中」4名（12.8%）であった。「その他」では、「親亡き後」や「特別支援学校卒業後5年後、10年後のこと」などの回答があった。

図2に、「児童生徒の進路指導の際、一番気にかけていることはなにか（複数回答可）」の回答を示した。最も多かった回答は「児童の意思・実態」230名（73.7%）であり、次いで、「保護者の意思」129名（41.3%）、「児童の可能性」108名（34.6%）、「事業所との連携」58名（18.6%）、「学校の方針」5名（1.60%）であった。「その他」では「本人のよさが発揮でき、家族を含めた全員にとって最善の選択かどうか」や「本人にとって進路先があっているか」などの回答があった。

図3に、「児童生徒の進路に関する情報を得る際、主にどのようなものから情報を得ようとしているか（複数回答可）」の回答を示した。最も多かった回答は「事業所」180名（57.7%）であり、次いで「インターネット・資料」116名（37.2%）、「学校の卒業生」101名（32.4%）であった。「その他」では、「校内の進路指導部」「県や市役所」「研修会などへの参加・見学」などの回答があった。

図4に「保護者における進路指導の理解や配慮に関して思っていることや、話をする際、気を付けていること（複数回答可）」の回答を示した。最も多かった回答は「進路についての正しい情報提供」199名（63.8%）、次いで「保護者の意思」174名（55.8%）、「児童生徒の意見との一致」106名（34.0%）であった。「その他」では、「児童生徒の実態についての共通認識・長期的に生徒が居やすい場所となり得るか」や「生徒本人の卒業後の生活で何が最適か保護者（できれば生徒）と共通理解を図る」等の回答があった。

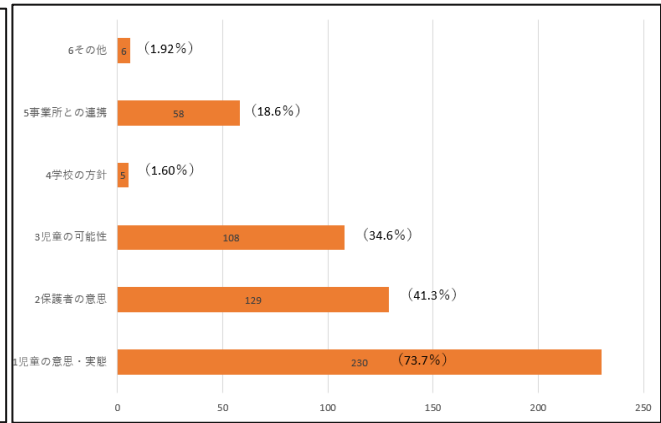
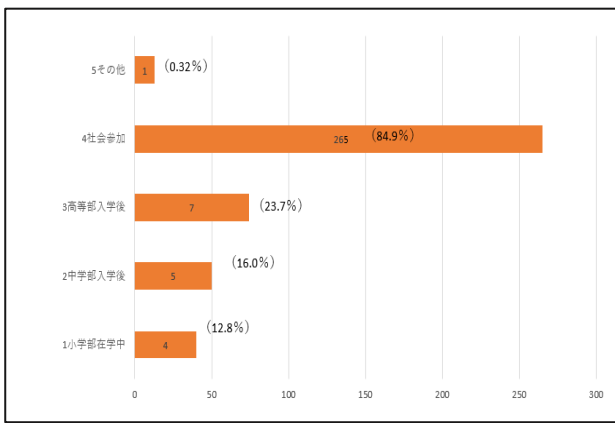


図1 児童生徒の将来をどこまで考えているか (単位:人) 図2 児童生徒の進路指導の際一番気にかけていることはなにか (単位:人)

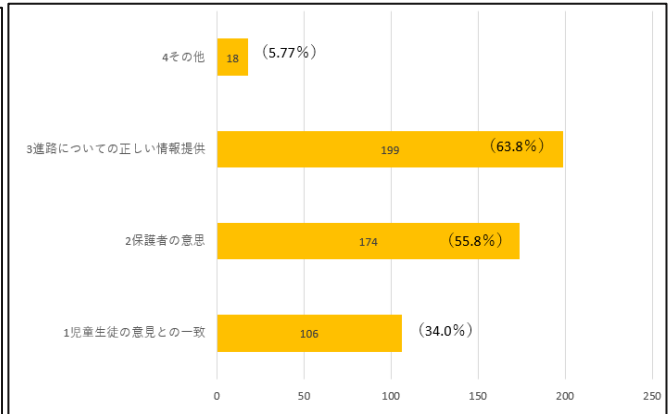
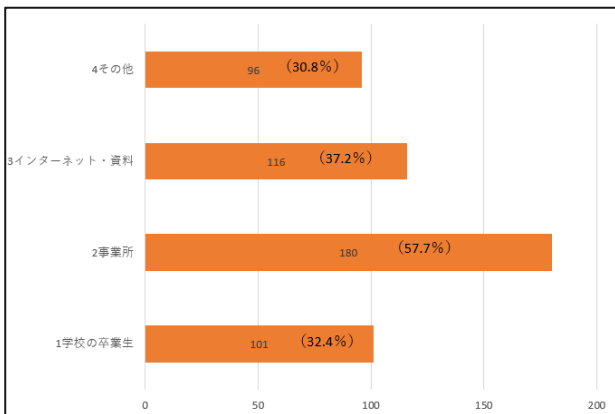


図3 情報源 (単位:人)

図4 保護者と話すときに気を付けること (単位:人)

「Q1 児童生徒の進路指導について意識していること」「Q2 保護者との関係で気になっていること」について自由記述で回答を求めた。なお、次の結果の回答数の()については、自由記述への回答者のうち回答数のパーセンテージを示している。

Q1 では小学部 126 名中 35 名 (27.8%)、中学部 93 名中 27 名 (29.0%)、高等部 93 名中 35 名 (37.6%) の回答が得られた。Q2 では小学部 126 名中 15 名 (11.9%)、中学部 93 名中 11 名 (11.8%)、高等部 93 名中 22 名 (23.7%) の回答が得られた。

Q1 において学部ごとに「A 本人の意思や強み」「B 保護者への対応」「C 情報」「D 自立」「E 社会性」「F 事業所」の 6 項目の意味内容に分類された。Q2 において学部ごとに「A 子どもの実態とのギャップ」「B 情報共有」「C 家庭の実態」の 3 項目の意味内容に分類された。

Q1 に関しては表 6 の通り、「A 本人の意思や強み」についての記述は、小学部 2 名 (6.25%)、中学部 6 名 (22.2%)、高等部 7 名 (20.0%)、「B 保護者への対応」についての記述は、小学部 4 名 (11.4%)、中学部 2 名 (7.41%)、高等部 6 名 (17.1%)、「C 情報」についての記述は、小学部 3 名 (8.57%)、中学部 1 名 (3.70%)、高等部 3 名 (8.57%)、「D 自立」についての記述は、小学部 16 名 (47.7%)、中学部 10 名 (37.0%)、高等部 4 名 (11.4%)、「E 社会性」についての記述は、小学部 7 名 (20.0%)、中学部 6 名 (22.2%)、高等部 14 名 (40.0%)、「F 事業所」についての記述は、小学部 0 名 (0.00%)、中学部 0 名 (0.00%)、高等部 2 名 (5.71%) であった。

Q2 に関しては表 7 の通り、「A 子どもの実態とのギャップ」についての記述は、小学部 5 名 (33.3%)、中学部 3 名 (27.3%)、高等部 12 名 (54.5%)、「B 情報共有」についての記述は、小学部 3 名 (20.0%)、

中学部 2 名 (18.2%)、高等部 3 名 (13.6%)、「C 家庭の実態」についての記述は、小学部 7 名 (46.7%)、中学部 6 名 (54.5%)、高等部 6 名 (27.3%) であった。回答内容は、以下の通りである。

表 6 高等部教員が児童生徒の進路指導について意識していること (自由記述)

<p>Q1 高等部</p> <p>A 本人の意思や強み</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保護者ではなく本人がやりたいこと、行きたい事業所をしっかりと聴く ・本人の意見を聞きながら、現在の持っている力を発揮しやすい事業所などの情報提供 ・生徒の意思や実態、保護者の思いを理解しすり合わせる ・本人が良さを発揮でき、家族にとって最善の結果へ ・児童生徒が何をしたいか、どこに行きたいかの確認 ・強みを見つけること、自らもその強みを理解して自信にできるようにすること。 ・自分の適性を知ること <p>B 保護者への対応</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒や保護者が把握している生徒の能力と実態の差をどう理解してもらい、就労や進学に繋げるか ・本人、保護者の希望を聞きつつ、将来本人たちが困ることが減るよう支援している ・本人・保護者が納得できるまで実習や話し合いをすること ・保護者の考え方 ・保護者連携 ・生徒・保護者の希望や願いに沿った進路への情報提供 <p>C 情報</p> <ul style="list-style-type: none"> ・情報提供や連絡を密にしている ・進路主事や経験のある先生から事業所や企業について情報を得る ・進路情報を提供して自分で考える機会を設定 	<p>D 自立</p> <ul style="list-style-type: none"> ・正しい自己理解への導き方 ・自分で進路を選ぶことが大事であり、自己理解が大切であること ・自分自身を客観的に見つめ、自分の理想と現状を知って生徒本人が納得できるよう意識している ・自分で考え、自分で決めるという意識を持つ <p>E 社会性</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人として社会人として当たり前のことを当たり前にする重要性 ・卒業段階がゴールではなく、卒業後も成長すること ・「やろうとする気持ち」 ・卒業後のイメージ ・先の長い人生を少しでも心豊かに過ごせるように ・具体的にイメージできるような見学や体験を勧めている ・卒業後の生活に活かせるような身近な題材で指導をすすめること ・長い視点で定着やステップアップなど社会の中で生き続けられる道筋を本人が見付けること。 ・生徒に合った(長く利用できる動機やことのできる)場所をさがすこと ・本人が長く続けて通える場所であるかどうかの見極め ・進路先と生徒の相性や卒業後の QOL について ・本人に合っていて、卒業後充実して楽しいと思ってくれる場所を見つける ・卒業後、安心して通える居場所探し ・ジョブマッチングへの合理的配慮 <p>F 事業所</p> <ul style="list-style-type: none"> ・企業側と学校側で温度差が見られるケースがあるため情報共有 ・事業所の様子
--	---

※高等部 93 名中 35 名 (37.6%) の回答を分類している。

表 7 中学部教員が児童生徒の進路指導について意識していること (自由記述)

<p>Q1 中学部</p> <p>A 本人の意思や強み</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本人の得意不得意 ・本人が中心にいること ・本人の意思に沿ったもの ・本人が主体的に選択・決定していけるか ・子どもたちの希望に沿う ・生徒のできる!を伸ばす <p>B 保護者への対応</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保護者の気持ちに寄り添う ・生徒の実態を保護者が正確に認識できていないので、上手な説明 <p>C 情報</p> <ul style="list-style-type: none"> ・進路に関する選択肢を適切に正しく提示できるような意識 	<p>D 自立</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自己理解をうながす ・進路決定が最終ではなく、そこから長く働くために在学中に生徒に対して何ができるか ・自己理解、自尊感情 ・働いたときに必要な力を身に付けること ・自分でできることを増やす ・どのような力が必要なのか常に頭に置く ・課題達成力を養う ・自己選択・自己決定 ・現在の指導が将来の進路にプラスになるよう意識している ・働くことに関してわかっていない生徒がいるので働くことは何か、そのために必要なスキルは何かを作業学習の時に繰り返す <p>E 社会性</p> <ul style="list-style-type: none"> ・物事に一生懸命に取り組む、他者の話を聞く ・「確認」をすること ・すぐに相談すること ・将来幸せに生活できるように進路指導 ・卒業後の 5 年後、10 年後をイメージする ・子どもが無理なく続けられること <p>F 事業所</p>
--	---

※中学部 93 名中 27 名 (29.0%) も回答を分類している。

表8 小学部教員が児童生徒の進路指導について意識していること（自由記述）

<p>Q1 小学部</p> <p>A 本人の意思や強み</p> <ul style="list-style-type: none"> ・個人の願いに即した進路を果とする ・本人のストレンクスや意思を一番大事に考えている <p>B 保護者への対応</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保護者向けの施設（事業所）見学があることから、小学部から進路に関する情報発信は大切だと思う ・家庭環境や保護者の意見等、児童の背景にあるものも含めて個々に応じてやっている ・学校からの情報に偏ることの内容保護者間の横のつながりを大事にしている ・保護者対象の進路研修会への参加を促している。事業所見学の案内をしている <p>C 情報</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童生徒の強みや本人がずっとやり続けている職種の情報を提供できるように ・中学部・高等部での情報も得ること。備わって必要能力を知ったうえで、指導・支援をすること ・中学部・高等部について（体制も含め）情報を得ること 	<p>D 自立</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1人でできることを増やす ・自分自身の力でできることを1つでも多く身に付けられるような指導 ・中学生に向けて+将来必要とされる技能をいかに身に付けさせられるか ・現在、指導・支援している内容が将来の生活にどれだけいかされるか ・小学部段階で取り組むべき指導 ・児童生徒の自己選択・自己決定 ・体調管理、コミュニケーションなど全てが進路につながるのではない ・今の時間を大切にしながら将来どうつながっていくか考える ・肯定的な自己イメージを育てながら必要な力を身に付ける ・現時点での得意不得意・課題が卒業後の進路選択や社会生活でどのように影響するかを考え必要な指導を行う ・できるだけ身の回りのことを1人でできるように手順書を活用している ・将来のための基本的な生活スキルを身に付けること ・日常生活の指導 ・日常生活スキルを育めるように意識している ・社会自立 ・基礎となるところは日々の中で身に付けることができるように気を付けている <p>E 社会性</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小学部段階から何がどの場面でできるか ・将来の社会参加を見ずえた学習指導（身辺自立や集団での過ごし方等） ・社会参加にあたって望まれる行動や態度の指導 ・出口指導にならないように将来を見据えた進路指導 ・見通しや目的意識をもたせる言葉かけ ・気持ちの良い挨拶と困った時の依頼の仕方。伝わる喜び ・ジョブマッチングがうまくいくような、進路指導 <p>F 事業所</p>
--	---

※小学部 126 名中 35 名（27.8%）の回答を分類している。

表9 高等部教員が進路指導の際、保護者との関係で気になること（自由記述）

<p>Q2 高等部</p> <p>A 子どもの実態とのギャップ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・金銭面から生徒が行きたいところではない事業所を希望している ・生徒が学校で見せる姿と家庭で見せる姿が違い保護者との共通認識が難しい ・生徒のもっている能力以上のことを求め続けること ・実態とかけ離れている進路先をイメージしていることが多い ・生徒の実態と保護者の希望の乖離 ・保護者が子どもの実態を過大評価しているケース ・保護者の希望と実態にずれがある場合のお互いの気持ちを分かり合えるように話を進めていくこと ・実態と保護者の意思にずれが出る場合、そのズレをうめるための話し合いが家庭で十分できていないことがある ・生徒の働く力に対する保護者と担任の認識のズレ ・保護者の希望を聞くことで信頼関係は構築されるが子ども本人や受け入れた事業所は果たしてどう思っているのか ・生徒と保護者のニーズの一致について ・意見が違った時の折り合いの付け方など <p>B 情報共有</p> <ul style="list-style-type: none"> ・連絡帳や懇談等で生徒の様子や変化など細かいところまでしっかり伝えて共有する ・しっかり共有することが大事 ・保護者と話し合いをすること <p>C 家庭の実態</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保護者が主体となって進路を決めること。その際、子供を中心とすることや子離れしてもらうこと ・何でもやってもらえるという認識があるのではない ・自分の子どもの実態を正しく把握できていない保護者に現実を段階的に伝えていることが難しい ・支援をするベースとなる「お金」が準備できないケースが多くあり、進路選択が狭められることがある ・卒業後の生活の仕方について、確認できる保護者とできない保護者がいる ・医療や行政とも積極的に連携を図って生徒の成長に活かしていくことがもっと進んでほしい

表 10 中学部教員が進路指導の際、保護者との関係で気になること（自由記述）

<p>Q2 中学部</p> <p>A 子どもの実態とのギャップ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童生徒の実態と保護者の希望との差 ・保護者のイメージしている将来と教師（学校）が思うことが同じ方向を向いていないこと ・保護者にとって利便性が高いということが第一で本人の意思や本人との相性などが重視されていないケースがあること <p>B 情報共有</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒の些細なことでも連絡して安心感や信頼関係を築けるようにしている ・もっと学校でのありのままの様子を見てもらい、困り感についての手立て等情報を共有できればいい。 <p>C 家庭の実態</p> <ul style="list-style-type: none"> ・様々な保護者の方があるので保護者へも個々のやりとりが必要だったりします ・配慮が必要な保護者さんが増えているように思う。相手を尊重した伝え方、傾聴の必要性を感じる ・進路に関心がない保護者との対話が難しい ・親はいつまでも“うちの子にはできない”と低評価し、挑戦の妨げとなる ・保護者に対して不平等感が生じないように配慮している ・保護者の方もなかなかピンとこないようで、いよいよ社会にできるようになって慌てるようなことが多い。早くから、担任から進路に関する話をしてもなかなか機が熟してなくて難しいことが多い。
--

表 11 小学部教員が進路指導の際、保護者との関係で気になること（自由記述）

<p>Q3 小学部</p> <p>A 子どもの実態とギャップ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教員の見通しと保護者の意思がどのくらい共通しているか ・教員の実態把握と保護者の方の子ども理解にずれがある場合。 ・生徒の実態と保護者の思いに差があることが多く、どう伝えるか難しい。 ・本人の実態と保護者の希望とのギャップ ・希望と現実のギャップ <p>B 情報共有</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小学部段階での情報提供の仕方 ・信頼関係を築く ・進路についての情報を積極的に提示していきたい <p>C 家庭の実態</p> <ul style="list-style-type: none"> ・将来のイメージが持てなかったり、年金がもらえるように本人の力を伸ばさないでほしいと思われたりするケースもあり、保護者の理解を深めていけるような進路指導・支援について考えていく必要がある。 ・保護者のなやみにどれだけ寄り添えるか ・提出物など必要なものをなかなか持ってこない保護者とのやりとりに困る ・今日の前の大変さにしか意識が向いていない保護者があるので、保護者の高等部卒業後の意識の高め方。 ・将来の進路を見ずえる必要があるのに、事業所見学等に参加しないこと ・保護者の障害受容について ・自分の子どもの障害・症状が受容できていない保護者が多く、将来について踏み込むことにはかなり配慮を要する。
--

IV 考察

知的障害特別支援学校の教員に対して行った、知的障害児の進路指導に対して意識する度合いを問う独自の全21項目の質問項目のうち、5段階評価を行った17項目への回答の平均値については、小学部、中学部、高等部すべてにおいて4点台であった。知的障害特別支援学校の教員には、知的障害児の進路指導に関して、全般に亘って関心を向けている傾向があるものと推察される。

ニーズの多様化が、「高等部生徒に対する現在の進路指導にどのような影響を及ぼしているのか、現状を把握するため、特別支援学校高等部の進路指導と特別支援教育に関する調査を実施した。生徒の「在学中」と「卒業後」の進路指導・支援を担う特別支援学校高等部の進路指導は、教育と福祉、就労支援という複数の要素が混在していることが把握できた」と報告されている（瀧名, 2020）。高等部教諭は、様々な要素を考えながら各生徒に応じた進路指導をしているため、各生徒の意思を受けとめながら卒業後の適応状態を推測しながら、将来のことを考えていると言える。このため、進路指導について考える要素が中学部教員よりも多い。また、思春期を迎え、自我が形成されて自分の将来について考え始めた生徒の指導をする中学部教員の方が、小学部教員よりも進路指導への関心が高いと考えられる。

本調査において、高等部教員>中学部教員>小学部教員の順で関心が高かった5項目は、児童生徒の本人の意思をどのように聞き出すか、児童生徒の本人の意思をどのように進路に取り入れるか、進路に関する情報を得る、将来のことについてほかの教員と共有する、進学・卒業後の生活を具体的にイメージできるような機会をもつ、に関することであった。つまり、実際に進路に関して本人や他の教員と話をし、共有したり、日々の生活の中で具体的にイメージできる機会が持たれていたりする。高等部教員は3年後には知的障害特別支援学校を卒業し、社会に出ていく生徒を指導しているため、生徒の社会的・職業的自立を支援するための効果的な指導をすることが求められる。したがって、高等部教員の関心が最も高く、中学部教員、小学部教員の順になるものと判断される。

自由記述については、Q1の「進路指導について意識していること」に対する回答に関して、6視点から捉えられた。「A 本人の意思や強み」、「B 保護者への対応」については、小学部・中学部・高等部で差がないことから、これらは全学部の共通した認識と捉えられる。

「D 自立」についての記述は、小学部で16名（自由記述への回答者の47.7%）に見られることから、今後の生活のために児童のできることを増やしていくことを重視していると考えられる。「E 社会性」、「F 事業所」については、高等部の結果が高い。高等部は学校教育の最終段階であり、社会へ出るための具体的な準備をする時期にあたる。それ故、本調査における、「児童生徒の意思をどのように聞き出すか」、「児童生徒の本人の意思をどのように進路に取り入れるか」、「進路に関する情報を得る」、「将来のことについてほかの教員と共有する」、および「進学・卒業後の生活を具体的にイメージできるような機会をもつ」に関する5項目については、高等部教員の方が、小学部と中等部の教員よりも高い関心があるものと判断される。このため、生徒が進路決定を行う際に、必要となるスキルの獲得、自立に求められる能力を段階的に獲得できる教育的支援を行っていくことが不可欠と考えられる。

Q2の「保護者との関係で気になっていること」に対する回答に関して、3視点から捉えられた。「A 子供の実態とのギャップ」の結果は、小学部5名（自由記述への回答者の33.3%）、中学部3名（自由記述への回答者の27.3%）、高等部12名（自由記述への回答者の54.5%）であった。高等部では、保護者の進路への意欲が高まっており、家庭における生徒と学校（教員）での生徒のギャップが感じられていることが顕著である。

「C 家庭の実態」についての記述は、小学部7名（自由記述への回答者の46.7%）、中学部6名（自由

記述への回答者の 54.5%)、高等部 6 名 (自由記述への回答者の 27.3%) であった。各学部ではほぼ同数であったため、全ての学部で進路指導における家庭の実態を気にしていると判断される。保護者の障害観や障害を持つ子供の社会参加に対する考え方や将来像に関わる内容であり、子供のキャリアの形成や就労についてどのように理解しているか、またどのような将来像を望んでいるかといった保護者の障害観とキャリアへの価値観や意識を育む重要性が指摘されている (藤井・川合・落合, 2013)。このため、子供の気持ちを尊重し、将来的な進路決定へと進めていく必要があるのではないかと推察される。

本調査における複数回答の結果から、児童生徒の進路指導で一番気にしていることは、各児童生徒の意思や実態であった。知的障害特別支援学校の卒業生の進路先の一つである障害福祉サービス事業所において、「知的障害特別支援学校の教育段階で身に付けてほしい力は、「仕事に必要な能力」、「BADL」、「自己管理」、「IADL」、「余暇活動」の 5 因子構造である」(桑原・三橋・斎藤 他, 2019) と報告されている。また、「生徒の思いや願いに寄り添いながらも社会的な現実を踏まえ、生徒がよりよく生きられるようにと願い、それをどのように支えていくことができるのかと考えて実践してきた教員の思いが、生徒の思いや願いとつながり、生徒たちの生涯にわたるキャリア形成の基盤をつくっていくのではないかと主張されている (今井・前原, 2023)。さらに、児童生徒の進路指導に関しても個別の教育支援計画が不可欠であるが、「個別の教育支援計画の活用について、「必要性」は強調されてきたものの、「多様性」が十分に共有されていない状況にある。個別の教育支援計画の活用も子供に応じて多様な用途がある」と言及されている (半澤・菅井, 2023)。これらの見解から、各児童生徒の意思や実態を把握した上で、保護者 (家庭) へ必要な情報提供を的確に行い、児童生徒の思いや願いに寄り添いながら、各児童生徒が意欲的に活動できる事業所等を選択できるように、個別の教育支援計画も含めた進路指導の充実が求められていると推察される。

知的障害特別支援学校の進路指導は、各児童生徒の望ましい勤労観・職業観を育成する特別支援キャリア教育の中に位置づけられる。各学部間における進路指導の捉え方の差や児童生徒本人と教員と保護者間のずれなど課題は多い。しかしながら、児童生徒本人に対しては、適切な情報提供とともに自己理解、自己決定を促す指導が意識的に取り組まれる必要がある。教員と保護者間においては、進路に関する具体的な情報提供や教員の専門性と保護者のニーズを融合させる協働関係の構築が喫緊の課題である。

V 結 論

知的障害特別支援学校の教員が、児童生徒の進路指導をどのように認識しているのかを検討するために、質問紙調査によって得た 312 名の有効回答を分析した。小学部・中学部・高等部の比較を通して考察した結果、①高等部教諭は、様々な要素を考えながら各生徒に応じた進路指導をしているため、各生徒の意思を受けとめながら卒業後の適応状態を推測しながら、将来のことを考えている。②高等部教員 > 中学部教員 > 小学部教員の順に関心が高いのは、児童生徒の本人の意思をどのように聞き出すか、児童生徒の本人の意思をどのように進路に取り入れるか、進路に関する情報を得る、将来のことについて他の教員と共有する、進学・卒業後の生活を具体的にイメージできるような機会をもつであった。④生徒が進路決定を行う際に必要となるスキルの獲得、自立に求められる能力を段階的に獲得できる教育的支援が必要である。⑤教員と保護者間においては、進路に関する具体的な情報提供や教員の専門性と保護者のニーズを融合させる協働関係の構築が喫緊の課題である。これらが示唆された。

謝 辞

本研究にご協力いただきました知的障害特別支援学校の校長と教員の皆様に心より感謝申し上げます。

引用文献

- 藤井明日香・川合紀宗・落合俊郎（2013）．特別支援学校（知的障害）高等部進路指導担当教員の就労移行支援に対する困り感—指導法及び教員支援に関する自由記述から—，研究紀要，60・61，111-128.
- 濱名元之（2020）．特別支援学校高等部の進路指導に関する研究．四天王寺大学大学院研究論集，（14）56-76.
- 半澤彰子・菅井裕行（2023）．「個別の教育支援計画」の作成・活用と連携についての研究：特別支援学校における現状調査を通して．宮城教育大学教職大学院紀要，（4），129-136.
- 今井 彩・前原和明（2023）．特別支援学校（知的障害）における生徒のキャリア形成に寄与する教育実践．秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要，（45），133-145.
- 神田英治・伊藤政勝・高橋徳樹（2018）．自閉症スペクトラム障害（ASD）のある人の就労支援に関する研究～特に知的障害特別支援学校高等部の職業的自立をめざした教育と卒業支援～北翔大学教育文化学部研究紀要，3.
- 桑原愛実・三橋翔太・斎藤遼太郎・奥住秀之（2019）．障害福祉サービス事業所の職員が考える利用者に対する知的障害特別支援学校で身に付けてほしい力：心理学的統計解析を用いて．東京学芸大学紀要，総合教育科学系，70(1)，377-382.
- 文部科学省（2011）．今後の学校教育におけるキャリア教育・職業教育の在り方（答申）平成23年1月31日 中央審議会
- 文部科学省（2018）．特別支援小学部・中学部学習指導要領 平成29年4月告示，海文堂出版.
- 文部科学省（2022）．特別支援教育資料（令和3年度）．
- Prediger, S., & Buró, R. (2024). Fifty ways to work with students' diverse abilities? A video study on inclusive teaching practices in secondary mathematics classrooms. *International Journal of Inclusive Education*, 28, Issue 2.
- 迫田真喜・今枝史雄（2023）．知的障害特別支援学校高等部における卒業後を見据えた学びについて—卒業生への生活状況調査を通して—．研究紀要/大阪教育大学附属特別支援学校，2，68-73.
- 清永百香・是永かな子（2015）．知的障害特別支援学校の進路指導における合理的配慮，高知大学教育学部研究報告，75，179-189.